



海外視察レポート

# 南海の楽園 ニュージーランドの素顔

ぶぎん地域経済研究所 代表取締役社長 島雄 廣



## はじめに

昨年11月初旬ニュージーランドを訪ねた。南半球であるから日本とは季節が逆転している。11月は六カ月足して、日本の5月と考えれば良い。しかし実際の気候は春というより、初夏に近い暑さだった。

多くの日本人にとってニュージーランドは、どこまでも続く牧草地に人口の10倍以上の牛や羊が放牧され、乳製品やキウイフルーツを輸出している、豊かな自然に囲まれた楽園のイメージが持たれる国である。しかし一方では、南海に浮かぶ「常夏の南国」と勘違いしていたり、隣国オーストラリアの一部と思いついで誤解している人もおり、ニュージーランドの実態を知っている人は、必ずしも多いとは言えない。

ニュージーランドと日本は、赤道で地図を折りたたむとほぼ重なり、ニュージーランドにもはっ

きりとした四季がある。一日の気温の変化が激しいので、一日の中に四季があるともいわれる。

人口わずか500万人、GDPは20兆円程度の小国であるが、医療費、教育費、出産費用はすべてタダ、手厚い失業保険や年金制度など北欧に並ぶ福祉国家である。食糧自給率は400%超という酪農大国であると同時に、WHOが発表する「空気のきれいさ」は世界第二位の自然保護大国、世銀の「起業しやすい国ランキング」では何度も世界一位に輝く、ビジネス環境の整った近代的な国でもある。

この多様な顔を持つニュージーランドの地に、最初に移り住んだのは先住民マオリであった。14世紀半ばに東ポリネシアから大海原を渡って辿り着いたといわれるマオリの人たちは、この緑に彩られた島をいかにものどかで、おおらかな響きをもつ「アオテアロア」と名づけた。それは「長く（ロア）、白い（テア）、雲（アオ）のたなびく地」という意味である。



ヨーロッパ人の最初は、17世紀半ばに、ニュージーランド西岸に到達したオランダ東インド会社のアベル・タスマンであった。タスマンの出身地オランダ・ゼーランド州にちなんで、「ニュージーランド」と名付けられた。その後、イギリス人探検家ジェームス・クックの調査によってニュージーランドがヨーロッパに紹介され、本格的な入植が始まった。

そして、19世紀にイギリスの植民地となり、第二次世界大戦後は、積極的な移民政策により世界有数の多民族国家へと発展して来た。この進化する「小さな大国」ニュージーランドの魅力はどのようなものか考えてみたい。

 「南海のイギリス」から  
「アジア・太平洋国家」へ

イギリスの植民地となっておよそ100年目の1945年の国勢調査では、総人口170万人中、94%がヨーロッパ系(ほとんどはイギリス系)で、マオリはわずか6%だった。

人口を増やすのは、イギリス人をニュージーランドに移住させることを意味し、オーストラリアの白豪主義と同様に、当時の為政者たちは「白いニュージーランド」、「南海のイギリス」を夢見ていた。

しかし、1970年代にかけてイギリスがEC加盟により貿易対象をイギリス連邦諸国からヨーロッ



テカポ湖/氷河の水分が周辺の岩石を溶かして流れ込む  
ミルクイー・ブルーの美しい湖

パに移すと、ニュージーランドは取り残され、アジア指向を強めざるを得なかった。母なる国イギリスから離れ、アジア・太平洋国家として歩んでいくとき、先住民マオリの文化こそ、ニュージーランドらしさの原点であることに白人たちも気づき始めた。

1984年、「白いニュージーランド」政策を見直し、人種基準による差別を撤廃して、技能資格を重視した移民を選ぶこととし、移民を経済力として見る政策に転換した。そして、ニュージーランドは移民政策方針の変更とともに、社会・経済的関係にとどまらず、文化的にもアジアを受け入れることとなった。

2018年現在、ニュージーランドの人口は495万人で、20年間で約100万人増加したが、主な要因は移民だ。特にアジア系住民の人口の伸び率は著しく、現在の54万人が2038年までには120万~140万人になり、今後5年以内にマオリ人を凌駕するとされている。それに引き換え、ヨーロッパ系住民は、現在の75%から2038年までには66%に減少すると予測されている。

ニュージーランド政府は、移民の数を年間6万人と見込んで各種政策に反映させようとしているが、2017年の移民は7万4千人にのぼり、政府の想定を大きく上回っている。移民の増加により、住宅価格は高騰し、賃金上昇は伸び悩み、交通渋滞を招いていると移民政策を批判するものもある。





マウント・クックの朝焼け／ニュージーランド最高峰の山。標高 3,724 メートル。  
周辺はマウント・クック国立公園になっている。

さらに、移民に対する職業ビザは主に情報産業分野や教育になっており、ニュージーランド産業を支える農業は入っておらず、ここにミスマッチが起こっているという指摘もある。



首都ウエルリントンにある国会議事堂／ハチの巣の形をしているため、通称「ビーハイブ」と呼ばれる。



### 女性活躍先進国

ニュージーランドは、1893 年国政レベルにおいて、世界で初めて女性参政権を実現した国である。アメリカは 1920 年、イギリスは 1928 年であった。

ニュージーランドには、新しいことに挑む開拓者精神と、女性も平等の働き手として尊重する平等主義が存在しており、その流れが女性の活躍を支える社会制度につながっている。2018 年時点のニュージーランドの女性議員の割合は、日本の国会にあたる議会（一院制、基本定数 120 名）で、実に 40%(48 名) に達している。

2017 年末に若干 37 歳のアーダーン首相が、三人目の女性首相として就任し、そのすぐ後に彼女は妊娠を発表、同時に「産休」を宣言した。しかもそのお相手は、テレビの有名人で「事実婚の彼氏」なのだが、彼は子育てに専念するという（この国の制度上、事実婚と入籍婚の扱いはまったく同じ）。国民の大半は、ふたりの姿勢にエールを送り、発表後の政権支持率は 4% 上昇した。



この国では、「キーウィ・ハズバンド」という言葉が有名だ。「メスが産んだ卵を、オスが飲まず食わずで孵す国鳥キーウィ」にちなんで、家事のほとんどすべてをできるニュージーランド人の夫のことを指す。男性は料理ができて、子育てを一緒にするのが当然で、いくら仕事ができても家のことができない男はダメとされる。

しかし、ニュージーランドの男性の本音は少し違うようだ。ニュージーランドでは、女性は自立し自分の意見をハッキリ言う人が多いが、男性は少しシャイな性格の人が多く、結婚した夫婦の約半数は離婚するという。ニュージーランドの男性の本音は、「付き合うならニュージーランドの女性でもいいが、結婚するなら日本人の女性がいい」らしい。

日本人女性が好まれる要因のトップ3は、

- ①おしとやかで上品さがある、
- ②気遣いができる、
- ③男を立てることができる、

というものだ。事実、日本から語学留学で来た女性が、ニュージーランドの男性とカップルになるケースは多いようだ。ちなみに、日本人男性はニュージーランドの白人女性からはモテないが、アジア系女性からは大変モテるらしい。



### 酪農王国ニュージーランド

戦前、ニュージーランドからイギリスへの輸出額は、総輸出額のほぼ9割を占めており、肉・乳製品・羊毛を初めとする一次産品加工物を輸出していたことから、ニュージーランドは「イギリスの海外農園」と呼ばれていた。しかし、イギリスのEC加盟により市場を失い、輸出先の多様化を図らざるを得なくなり、アジア諸国等とのFTAの締結を積極的に推進した。その結果、貿易相手国は大きく変化し、2013年以降輸出入とも、1位中国、2位オーストラリア、3位アメリカ、4位日本の順位となり、現在に至っている。

近年目覚ましく伸びているのは、乳児用粉ミルクの輸出で、2017年の一年間で輸出額はほぼ5割



善き羊飼いの教会／開拓民を記念して1935年に建てられた石造りの教会。

上昇している。最大の輸出相手国はやはり中国で、中国はなんと世界の乳児用粉ミルクの消費総量の43%を輸入している。

日本では、国内で消費するキウイフルーツの7割がニュージーランド産で、そのほとんどをゼスプリ (ZESPRI) から輸入している。キウイフルーツは完熟させたものは商品にならないので、キウイフルーツの強みである酸味を利用して冷蔵保存して、市場の動向を見ながら、必要量を市場に納めず。豊作貧乏にもならず、出荷と販売をコントロールできる画期的な手法を編み出した。そして、輸出業者の過度な競争を防ぐため、国際的な販売を行う会社であるゼスプリを設け、窓口を一本化している。

日本の果物消費量は、10年間で2割強減っており、リンゴやミカンも3割減少している。そのなかでキウイフルーツは5割も増やしており、日本の生産者は大いにゼスプリの戦略を研究すべきものと思われる。



ニュージーランド国鳥キーウィ／夜行性で翼が退化して飛べない。かつて1,000万羽ほどいたが、今は3万羽まで激減し、保護対象となっている。



ゼスプリ本社／キウイフルーツの緑色で建物内のインテリアが統一されている。

米国離脱後の TPP は、日本では TPP11 と呼ばれているが、正式には、CPTPP「環太平洋パートナーシップに関する包括的 (Comprehensive) および先進的 (Progressive) な協定」と呼ばれる。CPTPP は、ニュージーランドにとってビジネスチャンスの拡大につながるものであり、特に酪農製品は 95% が輸出向けで、期待は大きいものがある。CPTPP により、ニュージーランドは競争条件がオーストラリアと対等になったこともあり、参加国を取りまとめた日本政府のイニシアチブに対して高い評価をしている。



イーデンパークスタジアム／オールブラックスが本拠地とする「ラグビーの聖地」として知られる。



## 国民の誇りオールブラックス

ニュージーランドでは、スポーツは生活の一部である。そのニュージーランド人が最も熱くなるのが、国技ともいわれるラグビーである。人口 500 万人ながら、ラグビーファンも 500 万人と紹介されるこの国では、ナショナルチームであるオールブラックスの勝敗に国民が一喜一憂し、生活に影響を及ぼすほどの存在となっている。

「オールブラックス」の名が知れ渡ったのは、1905 年のイギリス遠征時の 32 勝 1 敗という恐るべき戦績と、それを報じたある新聞記事の印刷ミスからだった。

この時のチームは、バックスの攻撃参加による連続的なスイングプレーの導入で、歴史に残る戦績を挙げたが、それを見た記者の「選手が全てバックス (オールバックス) のようだ」という表現の「バックス」という単語に余分な L が入りスペルが変わってしまったことと、その間違っ ( ? ) スペル通りの彼らのユニフォーム姿のせいで、「全て黒」 (オールブラックス) となってしまったというのが、通説のようである。

オールブラックスは、白人だけでなく、マオリはもちろん、フィジー、トンガ、サモアなど近隣の島々から移住してきた人々から構成されている。多民族国家といわれるニュージーランドの現代社会の縮図を、オールブラックスに見ることができる。さまざまな民族の選手がニュージーランドの国を代表して「ハカ」を踊り、観客も自身を鼓舞し気持ちを一つに、オールブラックスを応援する。そこには、人種の区別はなく、ラグビーが国民を一つにまとめ上げる役割を担っている。オールブラックスは国民の誇りであり、



紙の大聖堂／2011年のクライストチャーチ地震で崩壊した大聖堂跡地に日本人の建築家 坂茂氏のデザインで建設された紙の教会。

オールブラックスの活躍が国民のナショナルアイデンティティ高揚のもととなっている。

オールブラックスが試合前に踊る「ハカ」は、勇猛果敢で好戦的なマオリの伝統の踊りであるが、中でも「カ・マテ!カ・オラ!」(これは死だ!これは生だ!)という掛け声とともに踊る姿は有名だ。「ハカ」のルーツはマオリ文化にあるが、英国のスポーツ文化を代表するラグビーに、ニュージーランドのハーツであるマオリ文化が自然に溶け込んでいるように感じられる。

ニュージーランドがラグビー王国と呼ばれ、世界の頂点に君臨することができるのは、5歳ぐらいの幼少期からラグビーに親しむことができるように整備された環境と、底辺に位置する地域クラブから頂点のオールブラックスまで、地域に根付いた確立されたラグビー機構があるからである。

この国の子どもたちは、ラグビーを通じて規則の厳守、フェアプレイの精神、相手への尊厳、仲間への信頼というジェントルマン・シップを学ぶ。ラグビーは青少年の人間形成にも大きく寄与している。

ラグビー日本代表のヘッドコーチ、ジェイミー・

ジョセフ氏はニュージーランド出身であるが、そのジョセフ HC が昨年のラグビーワールドカップ日本大会、予選プールの最難敵アイルランド戦の試合前に選手に語った言葉が印象深い。

「誰も勝つと思ってない。誰も接戦になるとも思ってない。誰も僕らが犠牲にしてきたものは分からない。信じているのは僕たちだけ。」ジャパンの勝利は、「静岡の衝撃」と世界に報じられた。

在オークランド日本総領事館において伺ったお話しでは、ラグビーワールドカップの日本開催によって、ニュージーランドにおける日本の紹介番組が増え、日本への関心が大いに深まったとのことであった。我々も、両国民の心を繋ぐ役割を果たしてくれたラグビーというスポーツに大いに感謝したい。

<参考文献>

「ニュージーランド入門」

日本ニュージーランド学会編 慶應義塾大学出版会 1998年

「小さな大国 ニュージーランドの教えるもの」

日本ニュージーランド学会・東北公益文科大学

ニュージーランド研究所 論創社 2012年

「LOVELY GREEN NEW ZEALAND」

四角 大輔 ダイヤモンド・ピク社 2018年

「ニュージーランド TODAY」

ニュージーランド学会 春風社 2019年